

會は決して後發的のものではなく、基督敎團體の成立に先在すべきものである。蓋し敎會は神より與へられたもので、人間の造り上げたものでないからである。此の意味に於て敎會は奇蹟であつて史的因果則の産物でない、我等はかゝる『奇蹟』を信ずることに依て始めて『中世』を理解することが出来る、『神祕』を信じない者には、史的生命的創造と建設とは遂に理解されないであらう。「こゝ含味すべき深みある言葉と思はれる。精神文化殊に美術方面に對して著者は獨特の理解を有つてをらるゝ、こゝは衆知のこゝ、本書全體として内容豊富、創意と暗示とに富み行文又暢達、一度巻をされば容易に之を措く能はしめざる魅力をもち到る處に著者獨自の姿を寫し出してゐる。又本書には網版色刷無色の挿圖二七葉あり、錦上華を添へ、巻末に中世史研究參考書目錄を十二頁に亘りて附せられたるは後進者のこよなき羅針盤なる。西洋史研究者は勿論敎養ある人士の一讀書たるは何人も異存なきこゝろに信ずる。(菊判五七七頁、東京富山房發兌、價四、五〇)〔中原〕

●銅銕銅劍の研究

文學博士 高橋 健自著

銅銕銅劍が吾が石金兩時代の特異な遺物として一方、銅鐸のそれと共に此の兩時代の間過渡期に屬するものと推考せられ近時其の研究の特に見るべきものあつて業蹟の顯著なものがある。題目のものは即ち前者に係る綜合的研究發表の第一者として見るべきものである。本邦發見の此種のもの約百餘例を數へ、朝鮮の約三十例と共に其の分布の九州北部を中心とし、四國、中國を含み畿内また其の出例あつて他方、銅鐸の分布に稍異なるものがあり、而かも兩者共に吾が石金兩時代の出現として肯定せらるゝ處のあるものである。斯かる興味ある題目を如何に解釋すべきかは吾が古代文化を知らんことをものに取つては見逃すことの出来ないものであらう。本冊は即ち十二章に分ち、分類、成分、分布、發見の事實、鑄造、型式の起源と其推移、分布と型式との關係、埋没狀態と遺跡の種別、伴出遺物に據れる考察、石劍との關係結論を以てし、ほゞ其の遺物の推究を各面より推究し得

たるものがある。而して附する約四十葉の圖版を約九十の挿圖が附加されてある。斯くて氏は型式學的に其の新古を叙し、其の古式の支那にあるを述べ、次で埋没狀態よりして古式は原始的古墳に退化式のものゝは宗教的思想に基く祭祀的遺跡の發見多きを告げ、共存遺物の前者に多き事例よりして古式の絶對年代を西紀前一・二世紀に置き退化型は其の伴出遺物の稀少なるによつて推究の困難なるも吾が古墳築造の盛行期にまで下るべきものあるを語つて居る。要するに本冊は吾が上代文化のこの特殊な遺物に對し、最も光明ある指示の一つを與へられたものゝ云へる。附するに銅鉾、銅劍、銅鐸等の遺物發見の分布地圖を以てせられてゐることは本冊を繙くものにと取つて至便に云へる。(四六倍判、本文二四五頁、圖版四〇、東京本郷區龍岡町、聚精堂發行、價五、〇〇)

●鑑鏡の研究

梅原 末治著

鑑鏡の研究が本邦上代遺物の主要な地位を占めるものであることは今更ら云ふまでもない。其の出土地域が日

支鮮の三國に立ち彼此相聯關する處あつて其の分布を絶年代に示現さるゝ古墳墓の研究としては鑑鏡を惜いては何者もこれに優るものはない。飛に故富岡謙藏氏「古鏡の研究」ありて以來、該問題に觸るゝ研究はこゝに盛大を加ふるものがある。著者梅原氏は富岡氏の眞摯なる指導によつて業を成し今ま富岡氏の七週忌に際して同氏没後の研究を發表せしもの蓋し本冊は「古鏡の研究」を相待ちて姉妹編とすべきものであらう。所謂王莽鏡に就いての疑問、獸首鏡に就いて、支那年號鏡の二三の新資料、年號銘ある支那古鏡の新資料、上代文化研究上の二三の新資料、支那古鏡の仿製に就いて、北朝鮮發見の古鏡等の七編を含み何れも最近に於ける同氏研究發表の諸論文を集結するものであるが、就中、北朝鮮發見のものは同氏によつて始めて綜合的に研究されたものである。附するに「考古學上より觀たる上代日鮮の關係」は氏の從來獲たる諸方面の資料に立脚して平易的に説述したるものである。(菊版洋裝本文二八七頁、圖版四九葉、東京市外犬岡山書店發行、價六、五〇)

西域發見の繪
 畫に見えたる
 服飾の研究

文學士 原田 淑人著

題目の研究報告は東洋文庫論叢第四冊として近刊されたものであつて、著者の云へる如く本冊を以て彙きに同氏の刊行せる「支那唐代の服飾」に姉妹篇をなすものであつて、西域文化が支那本土の文化に如何に密接なる關係あるかを遺存せる幾多の繪畫の斷片によつて推究し得たるものであつて四章に分ち緒説、西域發見の繪畫に見えたる西域諸國の服飾、結論として圖版四十一に挿圖數葉を附し、文獻に相待つて説明を助くるものである。

蓋し本冊は著者專攻の凝結したる近業と見るべきものであらう。(四六判版、假綴、本文七六頁、東洋文庫發行)

●南朝鮮に於ける漢代の遺蹟

大正十一年度古蹟調査報告第二冊として朝鮮總督府から近刊されたものである。永川琴湖面の遺蹟、慶州郡外東面入室里の遺蹟と發見の遺物、南鮮發見の銅鉞、銅劍、北部朝鮮出土の銅鉞、銅劍と其の遺蹟考説の五章に大別

し各章更に數節に分つて叙説さるゝもの附するに北部朝鮮にて新出の銅劍銅鉞を以てされてゐる。南鮮發見のものの特異なるものを包藏し吾人の耳目をそばたゝしめる金冠塚其他多くの墳壘を始め宮址、寺址、城址等の文化對照をなす諸遺蹟は既にほゞ調査せられたものであり、又た史前文化を語る貝塚遺物包含層、同散布地地調査のもの又た既に發表せられるものがあつたが本冊は其の兩者を連關する時代と遺物とに就いて詳論されてゐるものである。(四六倍判、本文一五六頁、圖版七二、挿面五十六葉、朝鮮總督府發行)

●山高郷土史研究會考古學研究報告書

山口高等學校内で組織されてゐる同會の第一次報告であつて、防長考古遺蹟概説、周防國吉敷郡秋穂二島村美能濱、同國佐波郡右田村高井の兩遺物包含地、同國同郡同村片山古墳等の調査報告を以てしてゐる。同校生徒小川五郎、三宅宗悅兩氏の執筆に係り、眞面目な研究態度は推賞すべきものがある。(菊版、六二頁、山高郷土史研究會發行)(以上島田)